

夏がゆく

館長 今川 英子

この夏は、自然界が愚かな人間どもを威嚇しているのではないかと思ってしまうほど、厳しい日々でした。そのような中でも古木の百日紅にピンクの花房があふれ、オレンジ色の凌霄花は太陽に負けじと力強く咲き、酔芙蓉が可憐に花をつけていると、「あなたたち、よく頑張ったわね!」とおしくなります。

今夏は竹久夢二生誕一四〇年、没後九〇年を記念して、「竹久夢二展」を開催しました。

過去には一九七六年一月、小倉玉屋百貨店で「竹久夢二美術展」が開催され、開会式には夢二の次男不二彦や、小倉出身の詩人・評論家で評伝『竹久夢二』の著者秋山清が参加しています。

竹久夢二は、一五歳から一六歳にかけての一年半、一九〇一年に操業したばかりの官営八幡製鐵所で筆工として働いていたようです。製鐵所の資料に今のところ本名の竹久茂次郎の記録は確認できないので、多分、非正規雇用であったのでしょう。前年二月、一家(夢二と祖父母・両親・姉・妹)は岡山から「一旗揚げよう」と当時の遠賀郡八幡村大字枝光(現・北九州市八幡東区山王)に引っ越し、夢二が家出同然に上京したのちも住み続けました。夢二とたまきの長男虹之助は、両親の離婚のためここに預けられ、地元の小学校、中学校に通っています。いつまで住んでいたかは不明ですが、一九二八年には母親、三一年には父親が妹の嫁ぎ先の京都で亡くなっています。

夢二と枝光との関係は実際にはここまでですが、一九七八年に竹久夢二文学碑が建立されて以来、地元の実業主、商店主、自治会、婦人会などの有志によって実行委員会が組織され、「夢

二まつり」が毎年九月に催されるようになりました。今年は四七回目。神事ではじまり、地域の方々による出店もあり、賑やかに「夢二音頭」も踊られました。わずか一年半の夢二の滞在であるにもかかわらず、町内をあげて夢二を顕彰しようとするその心意気に感動しました。地域の文学館としてお役に立てたでしょうか。創刊五〇周年を迎えた「海峡派」第一六一号が刊行されました。

本市は全国的にも職場雑誌や同人雑誌活動が盛んな都市として注目されてきましたが、散文の分野で本市を拠点に定期的に刊行し続けている同人雑誌は、「海峡派」のみとなりました。

若窪美恵発行人の、『海峡派』があるから書く、発表する、合評する、という一連の流れに自分の人生の一部を並行させていっている「人生の伴走者」という感慨に、同人誌に書くということの意義を考えさせられます。

北九州市八幡西区在住の詩人・鷹取美保子さんが六月に急逝されました。

当館主催の「あなたにいたくて生まれてきた詩」コンクールの事前選考を二〇一〇年の第一回からお願ひしており、いつも朗らかで鷹揚で、子どもたちの瑞々しい感性を見逃さず、選考会を牽引していただきました。

不慮の事故で逝かれた姉上様への想いを書いた詩「薔薇ほどに」で、第三四回伊東静雄賞を受賞され、この三月に諫早で贈呈式が行われたばかりでした。五月末に発行された鷹取さんの個人詩通信「あん」は六十号を迎え、末尾に「七十号までは頑張りたい。」とあります。

華やかで美しく、それでいて哲学的な詩を、憧れを抱きつついつも待っていました。

目次

○ 巻頭コラム「夏がゆく」	1	○ 林芙美子忌の集い
○ 第34回特別企画展	2	○ 宗左近忌
「『かわいい、のバイオニア 竹久夢二展 大正浪漫のマルチクリエイター』		○ 森鷗外を偲ぶ会
○ 開会記念講話	3	○ 劉寒吉 碑前の集い
○ 講演会「詩人になりたかった夢二 一大正ロマンに彩られた美と言葉より」		○ 朝比奈秋さん芥川賞受賞
○ 小倉昭和館で映画の協賛上映		○ 友の会自主企画「やさしい文章教室」
○ 北九州での夢二研究を牽引した「夢二を語る会」——会報紹介	4	○ 展覧会開催予告
○ 山崎ナオコーラさんトークライブ ~ミライの源氏物語~	5	(第35回特別企画展)
○ 共催「源氏物語五十四帖 王朝文学を筆にのせて」	6	「門司情景—文学でたどる」
(第46回光草書道展)		○ お祝い、お悔やみ/寄贈者・提供者、提供雑誌



二〇二四年度夏の特別企画展は、「かわいいのパイオニア竹久夢二展 大正浪漫のマルチクリエイター」を開催しました。

今年、生誕一四〇年・没後九〇年を迎えた大正浪漫の画家・詩人である竹久夢二の画業を一望する展覧会です。木版画、日本画、水彩画、ペン画、表紙や挿絵を手がけた雑誌、書籍、楽譜などのほか、「かわいい」というキャッチコピーで販売された「港屋絵草紙店」の紙小物（千代紙、封筒、便せん）を展示し、マルチクリエイターとして活躍した夢二を紹介しました。また、新聞連載小説「岬」の原画（北九州市立美術館蔵）や、関東大震災後の東京の様子を絵と文でスケッチし、社会問題に鋭い目を向けた「東京災難画信」（複写）も展示しました。展示室外では、夢二が「遠賀郡八幡村枝光」（現・八幡東区山王）に住んだことや、北九州での夢二の顕彰活動についてパネルと資料で紹介し、リーフレット「夢二と北九州」を作成しました。

○構成

【夢二登場 ― 明治期の夢二】

【夢二とその時代 ― 大正ロマン】

「夢二式美人画」、港屋絵草紙店、オリジナル木版画

木版画 装幀・挿画」「婦人グラフ」

「夢二の肉筆画」

「夢二の肉筆画」

【楽譜】「セノオ楽譜」、中山晋平作曲全集

【子どものための仕事 ― 童画・童謡・児童文学】

【新聞小説・ルポ】

小説「岬」、「東京災難画信」

【晩年の夢二】【年譜】

【夢二と北九州】（オリジナル展示）

（資料点数 約二三〇点）

来場者の声（アンケート）

・ 美人画以外に多様な活動や作品を残していたことが分かり、面白く拝見しました。（八幡東区・60代）
 ・ 世界情勢や病気により、思い描いた画家人生を歩めなかったことなど、必ずしも順風満帆ではなかった実情を知り、夢二という一人の人間に思いを馳せることができました。（小倉北区・30代）



「第47回夢二まつり」（諏訪一丁目公園、9/7・8）
 夢二まつりは、竹久夢二文学碑が枝光に建立されて以来、地元の方々を中心に毎年開催されています。

開会記念講話

二〇二四年七月二〇日

講師：大平直輝さん（夢二研究者）

初めに、全国各地にある竹久夢二の名前を冠した美術館や、コレクションを所蔵している美術館を紹介されました。続いて、エピソードを交えながら夢二の魅力が話されました。

夢二はコマ絵や挿絵の仕事が増えてきたころ、水彩画を携えて画家の岡田三郎助を訪ね（一九〇八年）、美術学校に進学すべきか助言を求めます。岡田は夢二の才能を生かすには独学でやっていったほうが良いと助言し、夢二は画家として独自の道を歩むことになりました。

また夢二は、生活に美を取り入れることを提唱したウイリアム・モリスの「アーツ・アンド・クラフツ運動」や、ヨーロッパの美術雑誌などから影響を受け、自身のデザインにも取り込みました。港屋絵草紙店での小物のデザイン



大平直輝さん

ンをはじめ、雑誌や書籍などのレタリングデザイン、グラフィックデザインなどにも才能を発揮しました。なかでも、「セノオ楽譜」のデザインは、夢二が楽しんで行った仕事のひとつでした。

大平さんは「夢二は天才マルチアーティスト。百年以上経っても古臭くないレトロモダン」が魅力だ。これからも長く愛されていくだろう」と話されました。

来場者の声（アンケート）

・夢二は天才であり多方面に才能のある素晴らしい人物だと再認識しました。（小倉北区・70代）
・夢二のエピソードをユーモアをまじえて話され、楽しめました。（八幡西区・60代）

講演会

「詩人になりたかった夢二」
—大正ロマンに彩られた美と言葉より—

二〇二四年八月二四日

講師：石川桂子さん（竹久夢二美術館学芸員）

夢二の人生を、日記や随筆、詩など夢二の言葉とともにたどり、人物像や作品の魅力をお話されました。

初めに、「私は結論へ到達したくない。いつもプロセスにいたい」（日記



石川桂子さん

一九一〇年一月二日」という言葉が象徴するように、夢二の人生は変化の連続であったと紹介しました。また、夢二の創作には、恋愛、旅が欠かせないものでした。東北から九州まで日本中を旅し、孤独、郷愁など自身の内面や、自然の一場面を切り取り詩と絵で情緒豊かに表現しました。

夢二は一五歳から一六歳の一時期、八幡村枝光（現・八幡東区山王）に住んでいました。その後、一九一八年の長崎旅行の途次、枝光の実家に立ち寄っています。石川さんは、滝の絵（菅生の滝か）が水彩で描かれた葉書「夢二 筑前枝光町にて」（竹久夢二美術館蔵）を紹介。消印の年が読みとれませんが、文面の内容と「女学世界」（一九〇八年一月号）掲載のペン画「筑前八幡の浜」が対応すると推測され、葉書が一九〇八年のものでこの年にも夢二が枝光に來ていることを指摘されました。

最後に、「夢二は北九州にもゆかりのある画家・詩人。これからもぜひ夢二に親しんでほしい」と締めくくられました。

来場者の声（アンケート）

・北九州と縁があったとは知らなかったです。独学でこんなに人を引きつける絵を完成させるとは、やはり秀でた才能があったのだでしょうね。（小倉南区・70代）

小倉昭和館で 映画の協賛上映

二〇二四年八月二四日～九月六日

竹久夢二を描いた映画二本を協賛上映いただきました。上映作品は、「竹久夢二物語・恋する」（松竹一九七五年／監督・斎藤耕一、主演・北大路欣也）、「夢二」（リトルモア、マジックアワー二〇二三年4Kデジタル完全修復版／一九九一年製作 荒戸源次郎／監督・鈴木清順、主演・沢田研二）。九月一日は、上映のあと、文学館小野恵学芸員が企画展の紹介を兼ねて夢二についてトークを行いました。



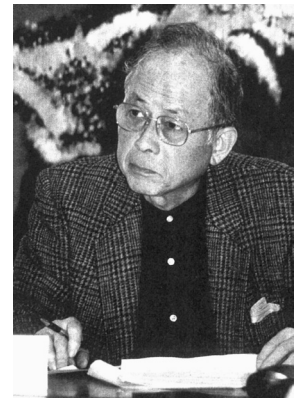
写真提供 小倉昭和館

北九州での夢二研究を牽引した「夢二を語る会」——会報紹介

竹久夢二は、一九〇〇（明治33）年二月、家族とともに、岡山県邑久郡本庄村（現・瀬戸内市）から「遠賀郡八幡村大字枝光」（現・北九州市八幡東区山王）に転籍し、翌年夏ごろ上京するまでを過ごした。竹久家が居住した場所に近い諏訪一丁目公園には、七八（昭和53）年、竹久夢二文学碑が建てられ、以降毎年九月に「夢二まつり」が開催されるなど、枝光地域の住民を中心に夢二の顕彰が行われてきた（※夢二まつりは現在も続く）。

一九九四（平成6）年七月、夢二研究を目的とする「夢二を語る会」が発足する。北九州の同人誌「九州作家」同人の栗田藤平（主宰）と、枝光地区で竹久夢二の顕彰活動に携わっていた原田準一（代表）を中心に「夢二芸術」と九州の関係を掘り下げること」を指し、隔月で例会を開催、例会の報告や栗田の夢二作品の解説を掲載した会報を発行した。当館が所蔵する会報・全九四号を概観し、掲載内容の一部を紹介する。

一号（九四・一一）〜七号（九五・九）は、夢二を知る地元の人（立石由美子さん）や縁者（夢二の姉・松香と結婚した栗山安兵衛の甥の子 栗山崇輝さん）の話の掲載など、八幡（枝光）時代の夢二、九州と夢二のかかわりが掘り下げられた。栗田藤平「夢二と八幡の家族たち」（一号）では、夢二が上京したあとの父・菊蔵、母・也須野、姉・松香、妹・栄、長男・虹之助、二男・不二彦の生涯を紹介。「竹久家が岡山を出郷したあと、まとまって暮らしたのは八幡時代だけ」で、その後「一家



栗田藤平さん
（写真：© 個人蔵）

は離散」したことをふまえ、「夢二の家族を見る目に常に悲しみがあつた」と指摘される。

その他、栗田「長崎十二景の誕生まで」（二号）、同「長崎十二景解説と別府での短歌」（三号）、立石由美子さんを囲む座談会「八幡に残る夢二の影」（五号）、関谷定夫（当時西南学院大学神学部教授）「夢二とキリスト教」（四号）、本田幸信（俳人）「竹久夢二と俳句」（六号）など各会員が例会で発表した研究成果の概要が掲載された。

七号で栗田は、「夢二は単に美人画家と思われていますが、芸術的、思想的にも幅広く、未知の部分の多い人です。その全体像をつかみ、真実の人間像を明らかにするため、青年期を過ごした八幡時代を研究し、地元と密着した形で語る会の歩みを進めたい」と会の目的を再確認するとともに、今後、「夢二画をテーマ別に解説」していくことを記した。栗田の「夢二における手―永遠の女性像を求めて」（九号）、「夫婦げんかに見る夢二の人間研究」（一一号）、「夢二と異国情調について」（一九号）などが掲載された。

さらに会報を「読み物」として楽しめるものによつて、夢二の作品に栗

田が解説をつけたコーナーの連載を開始する。一号（九六・六）〜二九号（九九・四）は版画、三〇号（九九・五）〜九四号（二〇〇九・一〇）はペン画（主に欧米滞在中のスケッチ）を一品ずつ取り上げた。この連載は、著書『人生派・竹久夢二』版画・デッサンから」（夢二を語る会 九九・三）、「お白銀のチロル―竹久夢二の米欧無銭旅行」（武蔵野書房 〇八・一〇）に結実した。



会報 11号

栗田以外の会員の研究報告も掲載された。——西章「大正浪漫と竹久夢二―有島武郎からの視点も入れて」（三四号）、菊竹閣三「正木不如丘」（四九号）、西章「有島生馬―最大の理解者の一人」（五一・五二号）、山口公和「石上露子に贈られた女扇子」（五三号）、市丸薫「宵待草碑のほとりに住んで」（五四号）、山口「研究報告」（六八号、六九号）など。

第二四回例会（九八・四）から、夢二研究を深める目的で「夢二日記」の輪読が始まる。栗田は、「夢二日記を読めば救い難い愚昧な夢二を見るかもしれない。しかし素顔の夢二と、その美人画のすばらしさをスライドで対比することによつて、芸術家の秘密の一端に触れることができるだろう」（二

二号）と、「夢二日記」を読む意義を記した。二三号から最終号まで栗田の解説が掲載された。

会報からは、例会以外の会の活動報告、北九州での夢二顕彰の動きなどを知ることできる。——「竹久夢二木版画展」の開催（主催・夢二を語る会、九五・九・六〜一〇 市立旧百三十銀行ギヤラリー）（六号）、夢二居住跡碑の建立（一四号）、J R 枝光駅の駅名表示板への夢二の絵の使用と選定の依頼を受けたこと／原田（二九・三一）号、「夢二通り」についての地元民の要望を行政と折衝中であること／原田（四〇号）、「夢二まつり」三〇周年記念行事について／原田（八一号）、北九州市立美術館が購入した夢二の画「桐下別離」の観覧と解説（九四号）など。

二〇一〇（平成二二）年四月、「夢二を語る会」は栗田の死によつて解散となり、会報は九四号（〇九・一一）が最終号となった。



山崎ナオコーラさんトークライブ 『ミライの源氏物語』

二〇二四年八月一日

『ミライの源氏物語』(二〇二三・三、淡交社)を上梓された山崎ナオコーラさんのトークライブの抄録をご紹介します。聞き手は今川英子館長が務めました。

会場 J・COM北九州芸術劇場
小劇場
参加者 一三〇名

——Burkhanuaドゥマゴ文学賞も受賞された『ミライの源氏物語』は、現代の視点で『源氏物語』を読み解かれたと感じました。

最初に『源氏物語』を読んだのは高校時代でしたが、モヤモヤを当時は言語化できませんでした。卒論で取り上げたときも「女性の描き方がへんだな」と思ったのですが書けませんでし。二十年経ってだんだん社会が変わり、思うことを口に出していい雰囲気を感じ、『ミライの源氏物語』を書きました。実は怒られないかと少しびくびくしながら連載していましたが、年上のかたにも「私もモヤモヤしていた」とおっしゃっていただいで、昔からみんな疑問を感じていたのだなと。

——つい「できるだけ当時の感性に沿って読まない良さがないから」などと考えてしまいます。

もちろんそういう読み方も大事だし、いいと思います。自分で書くようになるのと読者が気を遣って作者の頭を覗いてみようとしてくださるんですけど、作品は作者のものではなく読者のものだとも思っています。『源氏物語』も、平安時代の菅原孝標女たちは作者に沿った読み方ができたでしょうが、現代は言葉も社会規範も違うし、「この恋愛ひどすぎるんじゃない？」と感じ



山崎ナオコーラさん

てしまう。こうした感情を押し殺さず、大事にしながらか楽しんでいいのではないかと。

末摘花は、ルッキズムという言葉で紹介されていますが、容姿至上主義で美しい人ばかり登場する中、不美人として描かれます。光源氏が幼い紫の上と「あまりきれいな人じゃないんだ」と噂話をしてふざけあうシーンでは、他人の容姿のことを悪く言うのはいやだと思っても、人の噂話で盛り上がる楽しさも分かるから、自分の中の差別や不倫といったいやなシーンがあるから読まないというのではなく、自分なりの読み方で読んでいただきたいなと思います。

——光源氏と紫の上の関係も、年齢差ではなく、まだ幼い子を結婚の対象にしてしまうことが問題だと。

現代人は一三とか一四の子との結婚に違和感を覚えますが、当時は「小さい大人」くらいの感覚だったと思うんですね。断罪するのではなく、違和感を抱えたまま読むことを考えていきたいのです。

——登場人物では朧月夜が人気ですね。朧月夜は積極的だし仕事を持っていて、意思もあって恋愛もする。現代の読者にも「こうありたい」というかたが多そうですね。

——嫉妬を表に出したくはない、でも生き霊になってしまふ……という、六条御息所にも惹かれます。ナオコーラ

さんは誰がお好きですか。

逆に受け身の浮舟や女三の宮ですね。私は十代の頃、人前で話せず主体性もなかったのですが、「女性は主体性を持つて」とか「明るく」という話や物語ばかりで、私みたいな人はいませんでした。輪郭の感じられない女三の宮や浮舟に、「これでもヒロインが務まるんだ」と感じました。

女三の宮は「源氏を裏切った」と、読者にも不人気です。でも、どう読んでも性暴力の被害者で、裏切るようなことはしていない。いまだと、「服装や飲酒のせいではない、被害者には落ち度はない」と言いますよね。垣間見される場面も、気を張っていなかつただけでそんなに責められ、読者に愛されない理由になるのかなと。

——卒論でも扱われたという浮舟についてもお聞きしたいです。

浮舟は二股をかけたように読まれてきましたが、彼女もやはり被害に遭っているだけだと思うんです。意思も人格もなくただ流されてきて、でも、最後は自分で出家することを決める。それまでのヒロインたちは恋愛でしか生きてこれなかったのに。

私たちには出家は身近ではないですけど、紫式部は恋愛物語の外に出るところで終わらせたかったのではないかと読みをして、「浮舟かっこいい」と思っています。紫式部は、ただ恋愛

を描こうとしたのではなく、社会のいろんなひとを描こうとしたのではないかと感じます。

——第三部は近代小説に近い感じがします。

現代人にとって読みやすいですね。『源氏物語A・ウエイリー版』(穂矢まりえ・森山恵 共訳)は英訳を現代語訳したもので面白く、訳者などの後生の人間が物語を育てたのを感じます。読解って自由なんだ、『源氏物語』は紫式部のものでなく、自分たちのものなんだって。

——勸善懲悪や好色の戒めなど、時代によつていろいろな読まれ方をしてきましたね。江戸時代には本居宣長が「湖月抄」で緻密に解釈しました。今わたしたちがどう読むかということも押さえていかないと、未来に繋がらないということでしょうか。

そうですね。本居宣長たちのバトンを次に繋げたくて『ミライの源氏物語』というタイトルにしました。

『源氏物語』は登場人物の名前がほとんど出てこず、読者が夕顔とか末摘花といったあだ名をつけた、つまり読者が参加してきたんですね。だから、いまふうに読み解いてもいいと思えますし、こうした読者の空気が、未来の人に「私も読んでみようかな」と繋がるとかと思っています。

野心として、『源氏物語』の現代語訳と、浮舟のその後を現代小説で書きたいです。「尼同土で楽しいよね」とか。楽しみにお待ちしています。

参加者の声 (アンケート)

「作品は読者のもの」という言葉に感銘を受けました。これから自由に読みたいと思います。

(40代・八幡東区)

恋愛の外に出る決意をした浮舟に魅力を感じるといつかここに共感しました。

(40代・山口市)



共催「源氏物語五十四帖
王朝文学を筆にのせて」
(第46回光草書道展)

二〇二四年四月二七日～五月六日
光草書道会(橋村雅榮会長) 主催の
書道展は今回、長らく会員の憧れだっ
たという「源氏物語」に取組みました。
「源氏物語」五十四帖に「雲隱」の巻を
加えた五五篇すべてから、会員が印象
的な文章やフレーズを選び、書道の作
品として表現しました。

恒例の特別講演では、「源氏物語」
の研究者である沼尻利通さん(福岡教
育大学准教授)を講師にお迎えしまし
た。「源氏物語と紫式部」と題したお
話で、NHKの大河ドラマ「光る君へ」
の背景や見どころも解説していただき
ました。

展示会の来場者からは、「書も絵画
のようでとても美しい」「文字の美し
さはもちろん、紙の白い空間も良いな
あと思いました」などの声があつたほ
か、各帖のイメージをとらえた表装も
鑑賞されていました。



林芙美子忌の集い

二〇二四年六月三〇日

小森江西校区まちづくり自治連合会
主催による第四三回林芙美子忌の集い
が、門司の小森江西市民センターで開
かれました。毎年芙美子の命日(六月
二八日)に近い日曜日に開催し、林芙
美子についての講座や朗読会、コン
サートなどのイベントと献花を行って
います。今年も小森江の地域の方々や
門司区の関係者が参加しました。

今年のイベントは、シンガーソング
ライターちひろさんのコンサートでし
た。芙美子の詩に曲をつけた「花のい
のちはみじかくて」や、『放浪記』の
冒頭に出てくる「旅愁」などが歌われ、
皆で芙美子を偲びました。



宗左近忌

二〇二四年六月二〇日

戸畑図書館敷地内の宗左近記念碑
「鐵偶」前で宗左近の命日に、宗左近
忌が開催されました。

主催の宗左近ファンクラブ世話人、
和田米彦さんの挨拶ののち、代表者に
よる献花が行われました。続けて北九
州文化大使でもあるシンガーソングラ
イター、富永裕輔さんが「ひまわりの
花」と、宗左近の詩を用いた「響灘」
Les Miserables」の二曲を献歌され
ました。第二部では会場を飛幡八幡宮
の祇園会館に移し、千葉県市川市で活
動する宗左近・蕊の会の伊東美佐子さ
ん、「鐵偶」制作者の母里聖徳さんの
挨拶があり、富永裕輔さんのミニコン
サートが催されました。梅雨の晴れ間、
詩人を偲ぶ集まりとなりました。



森鷗外を偲ぶ会

二〇二四年六月一九日

森鷗外は一八九九年六月一九日に第
十二師団軍医部長として小倉に着任し
ました。これを記念し、北九州森鷗外
記念会が毎年六月一九日、紫川河畔の
文学碑前で偲ぶ会を開催しています。

小倉商業高校の生徒が、「小倉日記」
の冒頭を朗読したのち、「紫川の歌」(劉
寒吉作詞)を斉唱、参加者は献花で鷗
外の小倉滞在を偲びました。
会場を移して、養父克彦さん(北九
州森鷗外記念会理事)の講演「鷗外帰
郷説を読み解く」が行なわれました。

劉寒吉 碑前の集い

二〇二四年四月二〇日

作家・劉寒吉の命日、出身校の福
岡県立小倉商業高等学校主催で、「劉
寒吉 碑前の集い」が開催されました。
例年、文学館・中央図書館前の劉寒吉
文学碑前で行われていますが、今年はい
いにくの空模様となり、文学館交流
ひろばに急遽会場を変更し、実施され
ました。

劉は文芸同人誌「九州文学」を支え
続け、自身も芥川賞、直木賞の候補に
なりました。また森鷗外旧居の保存な
ど、北九州の文化振興に尽力しました。
式典では関係者の挨拶と、中央図書館
長、文学館長などの講話ののち、小倉
商業高校の生徒たちが劉作詞の校歌を
ブラスバンドの演奏で合唱。また新し
く刊行された劉の著書『西国の獅子』
が、ご子息の濱田源一郎さんから参加
者に贈られ、劉の足跡に思いを馳せる
集いとなりました。

朝比奈秋さん芥川賞受賞

二〇二四年八月二三日

本市が主催する「林芙美子文学賞」第七回大賞受賞者の朝比奈秋さんが、「サンシヨウウオの四十九日」で第一七一回芥川龍之介賞を受賞されました。



贈呈式に、武内和久北九州市長と今川英子館長がお祝いに駆け付けました。医師として働いていた八年ほど前、論文執筆中に突然思い浮かんだ映像を文章にし始めたのが執筆のきっかけという朝比奈さん。受賞スピーチでは「インスピレーションとして物語が来ると没頭してしまう」「あらがえない物語の力に自分の人



武内市長、朝比奈秋さん、今川館長

生が迷い込んだ」と語り、「なんであれ、書き続けていきます」と決意を述べられました。

朝比奈さんが林芙美子文学賞大賞を受賞された二〇二一年は新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、北九州市にお越しいただくことができませんでした。贈呈式当日、朝比奈さんから「ぜひ北九州市にお礼に伺いたい。みなさんにもお会いしたい」とのうれしいお言葉をいただきました。お会いできる日を楽しみにしています。

朝比奈秋さんは、二〇二一年「塩

の道」で林芙美子文学賞大賞を受賞、同作を収録した「私の盲端」で翌年デビュー。二〇二三年、『植物少女』で第三六回三島由紀夫賞、同年『あなたの燃える左手で』で第五一回泉鏡花文学賞、第四五回野間文芸新人賞を受賞されています。

朝比奈さんの今回の受賞作品や、これまでの著書は文学館で閲覧できます。

「サンシヨウウオの四十九日」作品紹介

双子の姉妹・杏と瞬は、ひとつの身体を共有する「はたから見れば一人に見える」結合双生児。父と心を通い合わせながら生きてきた伯父の葬儀のあと、姉妹は死について考え始める。自分たちの片方が死んだら、もう一方はどうなるのだろうか。芥川賞選考会では「小説にしかできない難しい設定を準備し、書こうという文学的な野心がまず評価された」そうです。

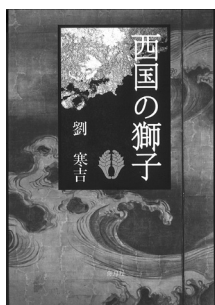


2024.7 新潮社

劉寒吉『西国の獅子』作品紹介

戦国、安土桃山時代の豊前・豊後を中心に九州六か国を支配した大友宗麟。戸次鑑連ら勇将を従え、毛利、島津、竜造寺らと覇を競い、キリシタン大名としてキリスト教国を築こうとした戦国大名の一代記です。

本作は「夕刊フクニチ」に一九七五（昭和50）年七月一日から二月三十一日にかけて連載されましたが未刊でした。この度、ご子息の濱田源一郎さんのご尽力で刊行されました。全国の書店、オンライン書店でお求めいただけます。



2024.5 海鳥社

友の会自主企画

「やさしい文章教室」

二〇二四年七月二七日、八月一七日友の会では、夏休み中の小学生に本や言葉に親しんでもらうことを目的に「やさしい文章教室」を開催しました。三回目となる今年も講師は江口恵子さん（友の会副会長、九州女子大学特任教授）です。三年生から五年生までの児童が参加、「小さな親切」作文コンクール入賞作品を題材に作文を書いたり、詩の朗読を通して詩の書き方を実践的に学びました。

第35回特別企画展

門司情景——文学でたどる

2024年10月26日～2025年1月26日



日本海と瀬戸内海を結ぶ関門海峡に臨む、九州・大陸の玄関口である門司は、古くから軍事・産業・交通において極めて重要な地域でした。明治期に入ると、鉄道が敷設され、港が築かれたことで筑豊からの石炭

の輸出港として急速に発展。大正・昭和期には全国有数の貿易港として栄え、多くの人が集まり、多くの文化が交差する場となりました。万葉、平安の時代の歌人たちが、中近世の文人たち、近代以降の多くの文学者が、歌や紀行文、詩や小説などで門司を書いていきます。

本展ではその紹介を通じて、文学という視点から門司という地域についてあらためて見つめていきます。

イベント

学芸員によるギャラリートーク

日時・2024年11月10日(日)、

12月28日(土)

2025年1月11日(土)

各回14時から30分程度

定員…各回先着10名程度

(申込不要)

お祝い

・長野ヒデ子さん(絵本作家・紙芝居作家)が、第63回児童文化功労賞を受賞されました。
・寺井谷子さん(俳人)が、第24回現代俳句大賞を受賞されました。
・朝比奈秋さん(作家)が、「サンショウウオの四十九日」で第一七一回芥川龍之介賞を受賞されました。
心からお祝い申し上げます。

お悔やみ

・鷹取美保子さん(詩人)二〇二四年六月二日にご逝去、72歳。
心からお悔やみ申し上げます。

■寄贈者・提供者

赤磐市教育委員会熊山分室、青柳文吉、有森信二、飯野文輔、五十嵐雅郎、池波正太郎記念文庫、泉水雄矢、井上靖記念館、茨木市立川端康成文学館、いわき市教育文化事業団、雲心書道会、大土由美、大畑凜、岡田功、岡山シティミュージアム、棧比呂子、風花随筆文学賞実行委員会事務局、神奈川近代文学館、川原一之、菊池寛記念館、北九州市立松本清張記念館、紀伊國屋書店、九州大学日本語学会、久留米市美術館、群馬県立土屋文明記念文学館、さいたま文学館、佐久間庸和、司馬遼太郎記念館、勝央美術文学館、仙台文学館、鷹取美保子、筑紫野市歴史博物館(ふるさと館ちくしの)、津和町立森鷗

外記念館、徳富蘇峰の会、豊島区立郷土資料館、土曜美術社出版販売、中原中也記念館、西林節子、日本近代文学館、日本現代詩歌文学館、沼津市芹沢光治良記念館、野田宇太郎文学資料館、panta rhei、姫路文学館、福岡県高等学校国語部会北九州地区部会、福岡市総合図書館文学・映像課、福岡ユネスコ協会、古谷龍太郎、文藝春秋、前橋文学館、松石泉、町田そのこ、岬の分教場保存会、三鷹市山本有三記念館、みやこ町歴史民俗博物館、森鷗外記念会、山口公和、和歌山市文化振興課

■提供雑誌

藍、青嶺、馬酔木、阿蘇、花鶏、あん、海、絵合せ、沖、GAGA、海峽派、回游、季刊午前、北九州国文、九州文学、九大日文、鯨々、自鳴鐘、書馨、scripta、青穂、粼、川柳くらがね、川柳マガジン、川柳むらさき、蘇峰、空、第三次ERA、鬘、天籟通信、新墾、虹野、浜木綿、ひびき、ふよう、ぼち袋、八雁、遼、りんどう

2024年10月1日発行
北九州市立文学館

〒803-0813
北九州市小倉北区城内4-1
TEL 093-571-1505
<https://www.kitakyushucity-bungakukan.jp/>

■開館時間
9:30～18:00 (入館は17:30まで)
■休館日
毎週月曜日
(月曜日が休日の場合は開館し、翌日が休館)
年末年始